

上気道と下気道 という言葉をご存じでしょうか？

上気道とは、鼻腔、副鼻腔、咽頭、喉頭のことで、鼻から声帯までを指し、下気道とは、声帯以下の、気管、気管支、細気管支、肺胞のことを指します。上気道のアレルギー性疾患であるアレルギー性鼻炎（花粉症を含む）と、下気道のアレルギー性疾患である気管支喘息には密接な関係があることが最近判明しており、この理論を **One Airway, One Disease**（一つの気道の同じ病気）と呼びます。実際、花粉症の季節にやや遅れて喘息を発症したり、花粉症の時期に喘息が悪化したり、あるいは逆に、アレルギー性鼻炎をきちんと治療すれば喘息が軽くなる、などの現象がよくみられます。

重症の喘息の約半数に好酸球性副鼻腔炎が合併！

鼻腔の周囲の頭蓋骨の中には、副鼻腔という広い空間があって、鼻腔と繋がっています。声を響かせるための空間だと言われてはいますが、本当の機能はまだよくわかっていません。この副鼻腔の粘膜にアレルギー性の慢性炎症である、好酸球性副鼻腔炎が起こることが最近増加しています。症状としては、鼻汁、鼻閉のほか、鼻茸を伴ったり、嗅覚の低下がみられたりすることが特徴であり、気管支喘息を合併することが多いとされています。副鼻腔炎といえば、昔よく子供にみられた、いわゆる蓄膿症は好中球性副鼻腔炎でしたが、最近では、このアレルギー性の好酸球性副鼻腔炎が大部分を占めるようになってきました。最新の医学的知見では、好酸球性副鼻腔炎が重症の喘息の約半数に合併しており、喘息の難治化の大きな原因の一つになっています。

鼻から気管支・肺までを同時に治療する Airway Medicine

喘息と診断した場合は、必ず副鼻腔 CT を撮影して、好酸球性副鼻腔炎の合併の有無を同時に見るのが重要であり、治療においても、喘息だけでなく、副鼻腔炎の治療を同時に行うことが必要とされます。治療法には、微粒子吸入ステロイドを口から吸って鼻から吐く方法が最新の治療として注目されており、ほかにも、ロイコトリエン拮抗剤の内服や抗 IgE 抗体の注射を使う方法もあります。

花粉症や副鼻腔炎は耳鼻科に通い、気管支喘息は呼吸器科に通う、という時代は去り、鼻から気管支・肺までのアレルギーを同時に治療する、Airway Medicine（気道内科）という診療科を創設していく努力が、医師の側にも求められていると言えます。